

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

— 守護段銭を中心として —

松 澤 徹

はじめに

本稿では、室町期の荘園に対する段銭の賦課と免除のあり方について検討することを通して、守護領国の形成過程における段銭の歴史的な位置を考察してみたい。

室町期における守護領国の形成過程を考えると、守護による段銭賦課・徴収権の掌握という問題は、従来から重要な画期の一つとして位置づけられてきた。⁽¹⁾それは南北朝動乱期を経て、守護の領域的支配が強化された結果として捉えられ、とくに室町幕府の権限によらず、守護独自の権限に基づいて賦課・徴収された守護段銭の成立は、のちの戦国大名による段銭の前提となったとして評価されている。段銭の賦課・徴収は、鎌倉後期以来の役夫工米など、大田文

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

による一國平均役の賦課に制度的淵源をもつとされる。つまり、段銭を賦課・徴収するためには、一国内の公田把握が必要不可欠であったといえ、そのために、段銭の問題が守護による領国把握の度合いを見極めるための鍵になっているともいえる。

室町期の守護による領国内の公田把握と段銭徴収について、先駆的な研究を行った田沼睦氏は、守護段銭の成立について、大山荘の事例をもとに次のようにまとめている。⁽²⁾すなわち、十五世紀半ば頃までの段銭は、賦課の名目や使用目的を明示するものであり、幕府の政策遂行の一環として捉えられるものであったが、文安年中以降になると、賦課の名目や使用目的を明示しない、単に「御要脚段銭」などとして一般的表現がなされるものが多くなるという。また、このような変化と平行して、以前はそれぞれの場合に応じて不定であった段銭額が、本段銭廿貫文に固定し、しかも年一回と固定する

というのである。田沼氏は、これらの「御要脚段銭」の多くが守護段銭である可能性について述べ、守護段銭の成立について、史料上の変化からその時期を確定する。この理解は、現在でも通説の位置を占めているといえ、例えば『国史大辞典』の「段銭」の項には、「守護は、幕府の賦課する段銭の徴収権を与えられており、その結果分国における段銭の賦課体系を自己の支配機構に組み込むことが可能であった。これを梃子として守護は自らを賦課の主体とする守護段銭をその分国に成立させてゆく。守護段銭は応永年間から史料上にあらわれ、十五世紀中頃には一般的に成立し、また次第に恒常化していった。」と説明されている。⁽³⁾

このように、守護段銭の成立は、幕府によって分国内の段銭徴収を委任された守護が、その段銭徴収のしくみを自らのために流用して実現させ、さらにその後の幕府権威の失墜によって、守護による賦課の独自化が進むという流れで説明されてきた。しかし、守護が段銭徴収のしくみを掌握したことで、段銭の賦課が領国に受け入れられ、守護段銭の賦課体系が成立すること、その間の説明にはなお疑問点が残るように思われる。守護による、なしくずしの賦課という説明によらず、守護段銭はなぜ可能となったのかについて考えることはできないであろうか。

ところで、近年、守護大名大内氏と戦国大名毛利氏の段銭徴収について考察した菊池浩幸氏は、両大名権力が段銭を賦課する論理について「地域的公事」という語を用いて表現している。⁽⁴⁾すなわち、

菊池氏は、「領主権力が地域社会の利害に沿う形で賦課した、いわゆる地域での「正当性」を有する公事」を「地域的公事」と名づけ、大内氏の段銭にはそのような性格が当初から濃厚であって、毛利氏は「地域的公事」化を進めたとする。さらにまた、毛利氏は、「地域的公事」の正当性から逸脱した強圧的な段銭収奪をも試みるものに、そのような段銭賦課は地下人らの抵抗に遭い、徴収困難な状況に直面することを指摘された。段銭の賦課・徴収についてその正当性を問うというこの視点は、これまであまり説明されてこなかった、徴収された段銭の支出先について、地域寺社の造営費用に下行されている例など、具体的な例を挙げて検討された結論であり、非常に興味深いといえる。

ただ、室町期における段銭の賦課・徴収に問題を限った場合、幕府段銭から守護段銭への移行期に、どのようにして賦課論理の転換が行われたのか、あるいは、段銭賦課の正当性を主張する論理は、守護と荘園領主、守護と荘園現地の百姓、あるいは荘園領主と百姓といったいくつかの交渉の場面のうち、どの場面で効力をもったと考えるのかなど、いくつかの問題点が浮かび上がる。その意味で、室町期の守護段銭に関する研究は、まだ進められなければならない余地を残していると考えるのである。

検討の素材としては、東寺領播磨国矢野荘に賦課された段銭をあつかうこととする。東寺百合文書等に残された豊富な段銭関連史料を用いて、先行研究でも触れられることの多い地域である。しかし、

これまでの研究では、室町幕府財政の研究という視点から、幕府段銭に重点が置かれてきた。本稿では、守護段銭成立期とその前後をふくむ十四世紀後半から十五世紀前半期について、段銭の賦課と免除の事例を、幕府段銭に限定せずに通覧することにより、守護段銭の成立について再考してみたい。

一 守護による段銭徴収と守護段銭の成立

まず、基礎作業として、矢野荘における段銭の賦課・免除について関連史料を整理し、表を作成した(表1・表2)。以下ではこの表を参照しつつ、関連史料を引用しながら考察していきたい。⁽⁵⁾ 矢野荘が所在する播磨国では、嘉吉の乱(一四四一年)によって、守護赤松家が滅亡し、代わりに山名氏が守護職に補任されたことによって、十五世紀の半ばに守護家が交替する。そのため、嘉吉の乱を境として、表1(赤松氏守護期)と表2(山名氏守護期)の二期に分けて整理した。表1の始期は、幕府による日吉社神興造替段銭の賦課があった応安五年(一三七二)とする。この年は、幕府による段銭徴収の基本文書としての「段銭事書」⁽⁶⁾によって、諸国の守護に段銭の課徴が布告された初見の年であり、幕府の職務の代行としてではあるが、先行研究によって、守護の段銭徴収権の確立の画期として評価されているからである。⁽⁷⁾ また、表2の終期は、応仁の乱直前の文正元年(一四六六)とする。前守護家の赤松氏が、再興を賭け

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

て山名氏と戦った播磨国の戦乱は激しく、その影響を受けて応仁の乱中から東寺の矢野荘支配は大きく後退し、乱後も請負代官からわずかな年貢が送られるという関係にとどまる。そして、請負代官制のもと、直接に段銭の賦課を示す文書は東寺のもとには残らなかった。このことはもちろん、矢野荘に賦課される守護段銭が無くなったことを示すのではない。この時期にはむしろ、戦乱の中で夫役等とともに、守護からの課役は恒常化したものと考えられる。寛正五年(一四六四)以降、請負代官の請文に「公方段銭并守護段銭以下臨時之課役等事、於入足者、一切寺家不可申入、為代官、可致其沙汰」⁽⁸⁾という文言が載るようになったことからわかるように、段銭賦課への対応が請負代官の責任となったことで、守護による段銭徴収は新たな段階に入ったと考えられるのである。そのため、本稿では応仁の乱前で区切って検討を加えることとする。

1 赤松氏守護期

表1をみると、一三七二年から一四三五年の六十年あまりの間に、三十件の段銭賦課があったことがわかり、平均して二年に一件、多い時期にはほぼ毎年、時には一年のうちに二件も、矢野荘は段銭賦課という事態に直面していたことがわかる。

まず、「段銭賦課の名目」欄は、史料に出てくる段銭の名を書き抜いたものであるが、これを見ると、伊勢神宮をはじめとする諸神社の修営費用と、大嘗会など朝廷の諸行事や内裏の造営といった朝

表 1 赤松氏守護期

| 年 | 段銭賦課の名目 | 賦課・免除主体 | 結果 | 関連文書 |
|-----------------|---------------|----------|------|---|
| 1 応安 5年 (1372) | 日吉神興造替料段銭 | 朝廷・幕府・守護 | 不明 | 矢野庄那波方地頭分日吉神興造替料段銭請取案 (ノ函97-4)・矢野庄名主百姓等申状 (ノ函25) |
| 2 応安 6年 (1373) | 外宮役夫工米 | 朝廷・幕府・守護 | 催促停止 | 東寺維摩頼意申状案 (京函68)・「学衆」十一月廿日条 (ノ函49)・東寺維摩頼意申状案 (ノ函52)・大龍寺領諸莊園役夫工米文書案 (ノ函50)・矢野庄名主百姓等申状 (ノ函25) |
| 3 永和 2年 (1376) | 大嘗会段銭 | 朝廷・幕府・守護 | 免除 | 後円融天皇綸旨(東寺文書書5-1)・東寺維摩頼意申状案(ノ函44)・矢野庄例名那波方大嘗会米段銭請取案 (ノ函97-6)・「学衆」五月二日条 (ノ函9)・室町幕府奉行人奉書案 (ノ函47-3) |
| 4 康暦 2年 (1380) | 神宝段銭 | 幕府・守護 | 免除 | 室町幕府奉行人連署奉書 (ノ函18) |
| 5 永徳 3年 (1383) | 御即位段銭 | 幕府・守護 | 京済 | 室町幕府奉行人連署奉書 (『高山寺古文書』)・守護赤松義則奉行人連署奉書 (ノ函48)・祐尊書状案 (ノ函49-1)・守護赤松義則奉行人連署奉書案 (ノ函49-2) |
| 6 至徳 3年 (1386) | 春日社造宮・公家進段銭 | 幕府 | 免除 | 「学衆」九月八日条 (ノ函60)・矢野庄例名那波方春日社等段銭請取案 (ノ函97-4) |
| 7 嘉慶元年 (1387) | 吉田社造宮・公家進段銭 | 幕府 | 免除 | 室町幕府御教書案 (ノ函68-3) |
| 8 明德元年 (1390) | 内宮役夫工米 | 幕府・守護 | 京済 | 室町幕府奉行人連署奉書 (ノ函54)・守護赤松義則奉行人連署奉書案 (ノ函101)・東寺書下案 (ノ函81)・「学衆」明德二年十一月廿日条 (ノ函65) |
| 9 応永元年 (1394) | 住吉造替段銭 | (幕府)・守護 | 催促停止 | 守護赤松義則奉行人連署奉書案 (ノ函59)・「学衆」九月廿九日・十一月〇日条 (ノ函12) |
| 10 応永 5年 (1398) | 建仁寺大龍庵段銭 | 幕府・守護 | 京済 | 「学衆」某月十五日条 (ノ函15)・大龍庵段銭配符 (ノ函266) |
| 11 応永 6年 (1399) | 興福寺供養出立料段銭 | 幕府 | 京済 | 室町幕府御教書案 (ノ函54)・「学衆」三月廿四日条 (ノ函109)・快俊良快連署書状案 (『教王護国寺文書777』) |
| 12 応永 6年 (1399) | 日吉段銭 | 守護 | 京済 | 矢野庄日吉段銭送進状 (ノ函95)・快俊良快連署書状案 (『教王護国寺文書777』) |
| 13 応永 8年 (1401) | 造内裏段銭 | 守護 | 京済 | 「学衆」四月十九日・四月〇日条 (ノ函71)・「廿一口」四月廿七日条 (天地12) |
| 14 応永10年 (1403) | 諸寺領段銭 | 東寺 | | 「学衆」十月三日・閏十月十八日条 (ノ函72)・「学衆方」応永十一年七月廿六日条 (天地16)・「廿一口」応永十二年八月七日・九月十日条 (ノ函2)・守護赤松義則奉行人連署奉書案 (ノ函132) |
| 15 応永12年 (1405) | 公方段銭 | 幕府・守護 | 不明 | 「廿一口」十月十九日条 (ノ函2) |
| 16 応永14年 (1407) | 官庁段銭 | 幕府・守護 | 京済 | 祐尊矢野庄等段銭京済請文案 (ノ函63-2)・室町幕府奉行人連署奉書案 (ノ函79-3) |
| 17 応永17年 (1410) | 外宮役夫工米 | 幕府・守護 | 催促停止 | 「廿一口」九月三日条 (ノ函5)・室町幕府奉行人連署奉書 (ノ函54)・「学衆」九月十五日条 (ノ函86) |
| 18 応永21年 (1414) | 御即位段銭 | 不明 | 不明 | 「学衆」十月十一日条 (ノ函19) |
| 19 応永29年 (1422) | 外宮役夫工米・要脚段銭 | 幕府・守護 | 京済 | 「廿一口」二月廿七日条 (ノ函5)・「学衆」二月廿七日・四月九日条 (ノ函96)・外宮段銭配符案 (ノ函113) |
| 20 応永29年 (1422) | 播磨国松原八幡宮段銭 | 守護 | 不明 | 「廿一口」九月卅日条 (ノ函5)・「学衆」閏十月九日条 (ノ函96) |
| 21 応永31年 (1424) | 外宮諸殿舎段銭 | (幕府)・守護 | 京済 | 「廿一口」五月卅日条 (ノ函11) |
| 22 応永33年 (1426) | 内宮役夫工米 | 幕府・守護 | 免除 | 「廿一口」六月十七日・七月十日条 (ノ函12) |
| 23 正長元年 (1428) | 守護段銭 | 守護 | 免除 | 「廿一口」六月十五日・廿三日条 (ノ函7)・守護赤松満祐奉行人連署書下案 (ノ函188) |
| 24 正長 2年 (1429) | 御即位・大嘗会・官庁等段銭 | 守護 | 免除 | 「廿一口」三月廿八日・五月二日・十三日・六月廿七日条 (天地25)・守護赤松満祐奉行人連署書下 (ノ函78) |
| 25 永享 2年 (1430) | 外宮仮殿段銭 | 幕府 | 京済 | 「廿一口」五月十七日条 (ノ函13) |
| 26 永享 3年 (1431) | 大嘗会段銭 | 守護 | 不明 | 「廿一口」二月廿二日条 (ノ函8) |
| 27 永享 3年 (1431) | 播磨国松原八幡宮段銭 | (幕府)・守護 | 免除 | 「廿一口」十一月卅日条 (ノ函8)・守護赤松満祐奉行人連署奉書案 (ノ函54-4) |
| 28 永享 4年 (1432) | 御分領段銭 (守護段銭) | 守護 | 免除 | 「廿一口」七月四日条 (天地26)・守護赤松満祐守護段銭免状案 (ノ函89-1) |
| 29 永享 4年 (1432) | 河内国菅田八幡宮段銭 | 幕府・守護 | 免除 | 室町幕府奉行人連署奉書案 (ノ函54-3)・守護赤松満祐奉行人連署書下案 (ノ函89-2)・「廿一口」十月廿三日条 (天地26) |
| 30 永享 7年 (1435) | 書写段銭 | 守護 | 免除 | 「廿一口」八月廿七日条 (ノ函14) |

* 行頭の番号に○印を付けたものは、守護段銭と判断したものである。

* 表中の「学衆」は学衆方評定引付を、「廿一口」は廿一口方評定引付を指す。

表2 山名氏守護期

| 年 | 段銭賦課の項目 | 賦課・免除主体 | 結果 | 関連文書 |
|-----------------|---------------------------|---------|------|---|
| 1 嘉吉 2年 (1442) | 賀茂社造宮段銭 | 幕府・守護 | 催促停止 | 「廿一口」十月廿九日・十一月十五日条(〈函16〉・守護山名持豊奉行人垣屋熙統書下案(ヲ函89・ 牛函89-3)) |
| 2 嘉吉 3年 (1443) | 外宮仮殿段銭 | 幕府・守護 | 免除 | 「廿一口」十一月十八日条(ち函14)・東寺維尊申状案(ヲ函102)・室町幕府奉行人連署奉書案 (ナ函34)・垣屋熙統書状(ヲ函103)・守護山名持豊奉行人垣屋熙統奉書(ニ函68-1)) |
| 3 文安元年 (1444) | 内裏御要脚段銭 | 幕府・守護 | 京済 | 守護山名持豊奉行人垣屋熙統書下案(牛函85) |
| 4 文安 2年 (1445) | 内宮役夫工米 | 幕府 | 免除 | 「廿一口」十一月廿四日条(〈函17〉・幕府奉行人連署奉書(牛函86)) |
| 5 文安 4年 (1447) | 公用段銭(守護段銭) | 幕府・守護 | 催促停止 | 播磨国矢野庄公用段銭配符(シ函113)「学衆」五月廿六日条(牛函110)・「廿一口」五月廿六日・ 晦日条(〈函19)・守護山名持豊奉行人連署奉書(牛函89-4)) |
| 6 文安 5年 (1448) | 公用段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 守護山名持豊奉行人連署奉書(牛函90) |
| 7 文安 6年 (1449) | 御要脚段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 守護山名持豊奉行人垣屋熙統奉書案(牛函93) |
| 8 宝徳 2年 (1450) | 官庫造宮段銭 | 幕府・守護 | 催促停止 | 「廿一口」五月四日・五日条(天地29)・下見泰正奉書案(ヲ函106)・持泰遵行状案(牛函94) |
| 9 宝徳 2年 (1450) | 公用段銭(守護段銭) | 守護 | 不明 | 「廿一口」七月十八日条(天地29) |
| 10 宝徳 3年 (1451) | 反銭(守護段銭?) | (守護?) | 不明 | 「廿一口」十一月廿八日条(天地30) |
| 11 享徳元年 (1452) | 内宮役夫工米 | 幕府・守護 | 免除 | 「廿一口」八月九日・十二日条(〈函20)・室町幕府奉行人連署奉書案(牛函97-1)・守護山名 宗全奉行人連署奉書(牛函97-2)) |
| 12 享徳元年 (1452) | 要脚段銭(守護段銭)・但馬 國門通寺造宮段銭 | 守護 | 免除 | 「廿一口」八月九日・十二日条(〈函20) 守護山名宗全奉行人連署奉書(牛函97-2)) |
| 13 享徳 2年 (1453) | 六条八幡宮造宮料段銭 | 幕府・守護 | 免除 | 室町幕府奉行人連署奉書案(牛函98)・垣屋熙統奉書案(ヲ函110) |
| 14 享徳 2年 (1453) | 要脚段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 垣屋熙統奉書案(ヲ函110) |
| 15 享徳 3年 (1454) | 内宮役夫工米 | 幕府 | 免除 | 室町幕府奉行人連署奉書案(牛函100) |
| 16 康正 2年 (1456) | 造内裏料段銭 | 幕府 | 京済 | 室町幕府奉行人連署奉書案(牛函101)・「廿一口」長禄二年六月廿三日・十月廿日条(〈函23)・ 長禄三年二月廿日条(天地34) |
| 17 長禄元年 (1457) | 播州公方社御新造段銭 | 守護 | 京済 | 「廿一口」十月七日条(〈函21) |
| 18 長禄 3年 (1459) | 内宮役夫工米 | 幕府・守護 | 京済 | 「廿一口」十月十一日・十五日・廿三日・廿四日・廿五日・十一月三日・廿八日条(天地34)・室 町幕府神宮頭人挙状案(ヲ函183)・雑掌増祐請文案(『教王護国寺文書』1640)・室町幕府奉行人 連署奉書(ヲ函91)・守護山名宗全奉行人垣屋宗忠奉書案(ヲ函92-1)) |
| 19 長禄 3年 (1459) | 用脚段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 「廿一口」十月十一日・十五日・廿三日・廿四日・十一月三日条(天地34)・守護山名宗全奉行人 垣屋宗忠奉書案(ヲ函92-2)) |
| 20 長禄 4年 (1460) | 御要脚段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 守護山名宗全奉行人垣屋宗忠奉書案(ヲ函94)・「廿一口」閏九月八日・十日・十八日条(〈函23) |
| 21 寛正 2年 (1461) | 勘料段銭(守護段銭) | 守護 | 免除 | 「廿一口」九月六日条(〈函24) |
| 22 寛正 2年 (1461) | 外宮役夫工米 | 幕府・守護 | 免除 | 室町幕府神宮頭人挙状案(牛函108-1)・室町幕府奉行人連署奉書案(牛函108-2)・守護山名 宗全奉行人垣屋宗忠奉書案(牛函108-3)・「廿一口」十二月六日条(〈函24)・「廿一口」寛正 三年二月四日条(ち函17)) |
| 23 寛正 4年 (1463) | 造作段銭・勘料段銭・棟別銭 (守護段銭) | 守護 | 免除 | 「廿一口」七月廿一日・廿三日・八月十九日・十一月三日・十一月十一日・十二月十四日・十五 日条(天地36)・矢野庄勘料段銭免状案(ヲ函130)・「廿一口」寛正五年四月廿四日条(ち函18) |
| 24 寛正 5年 (1464) | 屋形造作段銭・要脚段銭(守 護段銭) | 守護 | 免除 | 「廿一口」六月十三日・七月廿六日条(ち函18)・守護山名宗全奉行人垣屋宗忠奉書案(ヲ函133)・ 守護代宮田頼清遵行状案(ヲ函134) |
| 25 文正元年 (1466) | 御即位段銭・有福段銭 | 幕府・守護 | 免除 | 室町幕府奉行人連署奉書案(牛函119)・「廿一口」三月十日・十七日・十九日・廿三日・六月十 二日・八月二日条(〈函25) |

播磨国矢野庄における段銭の賦課と免除

延関連費用がほとんどを占めていることがわかる。それ以外には、応永六年の興福寺供養出立料段銭と応永十二年の公方段銭、そして表中に丸印を付けて示した守護段銭がある。このうち興福寺供養出立料段銭とは、応永六年三月十一日の興福寺金堂供養に招請する僧の費用をまかなうため、東寺領の他荘園とともに矢野荘に賦課されたものであり、二月二十九日付の幕府御教書で段別百文の沙汰が命じられている。⁽⁹⁾これは幕府行事費用に関する段銭賦課の早い例と考へることもできるが、広い意味では寺社修営費用の一部と考へられる。なお、応永十二年の公方段銭については、「為材木、自公方、被懸段銭」⁽¹⁰⁾とあるほか詳細は不明であるが、「材木」は建築資材と考へられるので、何らかの修営・造営に関わる賦課であると推定される。つまり、表1の段階では、矢野荘に賦課される段銭の大部分が、幕府の寺社・朝廷政策をうけて賦課された幕府段銭であり、応永十二年の例外を除き、必ずその名目や使途が注記されていたといえる。

ここで注目されるのが、守護段銭の場合である。三件検出した守護段銭のうち、永享七年の「書写段銭」は、「守護使不入之处、号書写段銭、令入部」⁽¹¹⁾とあり、守護方の使者が、賦課の名目として、播磨国書写山田教寺の修営を挙げていた。しかし、残りの正長元年の「守護段銭」、永享四年の「御分領段銭」二件については、ともにその呼び名からは賦課の名目・使途がはっきりとしない。すでに述べたとおり、大山荘を素材とした田沼氏の研究によって指摘され

ているが、矢野荘においても同様のことが指摘できることを確認した。それでは、なぜ名目を記さなくても、段銭を賦課することができたのであろうか。そのことをあらためて問題にしなくてはならないと考へる。

残存した史料をみる限りにおいて、播磨国における守護段銭の初例とされるのが正長元年のもので、すでに百瀬今朝雄氏および岸田裕之氏の指摘がある。⁽¹²⁾しかし、両氏ともに、幕府公権の下降分有という視点からその成立時期に言及するにとどまっているので、ここでは永享四年の事例とあわせて、史料を読み直していくことを通して、成立の契機について考へてみたい。

(史料①)

一矢野荘守護方ヨリ段銭懸間。代官注進申間、守護方へ免除之事申間、返答云、与方、別而。免除書下出之間。折紙進之由申、仍。上原方へ寺家為御悦、式百正可隨身之由、治定畢、守護段銭免除案

東寺雑掌申、寺領播州矢野荘当段銭事、以先々引懸、可被止催促之状如件、
正長元
六月十五日

——判
(上原) 性智 判

小河備中入道殿
上原備中入道殿⁽¹³⁾

正長元(一四二八)年、矢野荘に対して守護赤松氏から段銭が賦課され、そのことを供僧方の代官である上野房高市了快が報告して

きた。

この前年の応永三十四年は、守護赤松氏にとって危機の年であったといえる。九月、長く幕閣の中で重きをなした赤松義則が七十歳で死去したのにもなつて、子の満祐へ代替わりした。ところが、その直後の十月、突如將軍義持は満祐の播磨国守護職を没収し、御料国として赤松一族の持貞に預け置いたのである。その処置に怒つた満祐は、京都の館を自焼して、播磨へと下国する。この事件は、いったんは満祐の追討が決められたものの、十一月になつて、別件によつて義持が持貞に切腹を命じることになり、満祐は降伏して赦免されるという展開をみせる。この一件で播磨国では「国中乱」⁽¹⁴⁾といわれるような混乱状況が生じ、矢野荘の年貢八十石余も東寺へ納められず、守護方の白旗城へ兵糧米として納め置かれてしまう。そして、この「白旗城先納米」の東寺方への返還交渉は正長元年の三月まで続けられた。

そのような矢野荘をとりまく播磨国の状況の中で、この守護段銭の賦課の一件が持ち上がったのであった。史料①によれば、供僧から守護方に対して免除してくれるように申請していたところ、その返答に「他所の先例はあれこれとむずかしいことがあるけれども、特別に免除の折紙をお送りします」とあり、結局、赤松氏の奉行人連署による守護代宛での段銭免除状が発給され、矢野荘については免除されることが決まったようである。供僧は、寺家からのお礼として上原方へ二百疋を持たせると決めたという。ここで登場

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

する上原方とは、守護赤松氏の在京奉行人の上原性智のことで、東寺が守護方に対して行う様々な交渉の場にその名が見えることから、東寺にとつて守護方との交渉の窓口の役割を果たしていた人物であつたと思われる。この段銭について、東寺供僧は一貫して守護方のみと免除交渉を行つており、幕府との交渉は全く史料上にあらわれない。このことは、この段銭が守護によつて独自に賦課されたものであることを裏付けるものである。

こののち、十一月になると、矢野荘では徳政を求める土一揆が発生し、東寺はその対応について評議を重ねたことが知られる。⁽¹⁵⁾有名な正長の土一揆の蜂起が播磨国に波及したものである。この土一揆を鎮圧するため、守護方は軍勢を出して矢野荘を占領した。この事態は、東寺の守護方との交渉によつて守護方が兵を引くことによつてなんとか解決したが、翌永享元年（一四二九）正月には、播磨国でふたたび土一揆が発生し、守護赤松満祐は、自ら鎮圧のために下国している。⁽¹⁶⁾このように、守護段銭が賦課されはじめた播磨国は、これまで比較的安定していた赤松氏の領国支配が代替わりとともに動揺し、国内状況が混乱しはじめた時期にあつたといえる。

続いて、永享四年（一四三二）に賦課された守護段銭について見ていこう。

（史料②）

一 矢野荘反銭七月廿三日配符、来秋。^(付箋)上様御下向云々、披露処、先々免除支証可歎云々、⁽¹⁷⁾

(史料③)

(端裏書)
「矢野莊」

守護反錢免除案」

東寺雜掌申、播州矢野莊今度御分領段錢事、於彼寺領者、可被止催促之状、如件、

永享四年七月五日

信職判

(上原) 心源判
性智判

小河備中入道殿⁽¹⁸⁾

史料②では、七月二十三日矢野莊現地に配符が入ったとしているが、この評定が行われたのが七月四日のことであり、また文中に「来秋」とあることからみて、おそらく六月二十三日の誤りであると考えられる。この段銭はその名目を「上様御下向」のためとしており、上様とはここでは赤松満祐のことを指すから、守護の下向を名目として賦課された段銭であったことがわかる。「廿一口方評定引付」の同年七月二十五日条には、「一、今度赤松殿播州下向、於国可有会尺、正員五百疋、上原百疋、小河百疋、入足悉地下_ニ可被懸云々、乗真可下云々」⁽¹⁹⁾とあるように、この下向は実行されたらしく、東寺は現地で会釈銭を送り、その費用を矢野莊に転嫁しようとしていた。この段銭賦課に対して、東寺はもちろん守護方に免除を願い出る。その結果として発給されたのが史料③の七月五日付の赤松氏奉行人連署奉書であり、この中で単に「御分領段銭」と呼ばれてい

るのが、今回の守護段銭である。満祐が何のために播磨国へ下向したのかは不明である。しかし、永享元年の守護下向の例や前後の状況を考えあわせると、守護の下向は軍事行動の直接指揮、すなわち領国の治安維持のためであった可能性が高い。ここでは、守護赤松氏が段銭賦課の名目として、領国の治安維持を挙げているものと考えておきたい。矢野莊では結局は免除が認められるものの、守護の段銭賦課論理の一端を垣間見ることができたように思う。

次に、表中の「賦課・免除主体」および「結果」の欄について、その変化を見ていく。「賦課・免除主体」については、永和二年の大嘗会段銭までは、朝廷の関わりがあったことが関連文書からわかるが、その後は幕府・守護のみの交渉となり、たとえ賦課名目が朝廷関連費用であったとしても、賦課徴収・免除の権限は幕府に移行したものと思われる。そして、さらに時代が下るにつれて、賦課と免除をめぐる東寺による交渉の場面で、幕府が全く関わらないことが多くなるなど、幕府段銭であるにもかかわらず、守護の関わりが強まっていく傾向が読みとれる。

「結果」の欄で「免除」としたのは、幕府あるいは守護から段銭徴収の免除を認める文書（主に奉行人連署奉書）が出されている例である。「催促停止」としたのは、最終的に免除されたかどうかは定かではないものの、催促の一時停止や延期を命令した文書が残されている例で三件ある。免除に関する史料が多く残されやすいという点を考慮に入れても、矢野莊では一度は賦課された段銭が免除さ

れる例が多く、三十件中十四件にも及んだ。⁽²⁰⁾ また、表中の「京済」とは、莊園現地における守護使による徴収を停止し、京都の東寺から直接に納入することが定められた例で十件ある。「不明」とは、段銭が賦課されて、供僧の評定の中でその対応策などが議題として載せられているものの、その他の史料に乏しく、結果が不明な例である。以上のように、矢野莊に賦課された段銭は、約半分は免除あるいは催促停止が命じられ、残りは京済が認められた。⁽²¹⁾ このように表を一見すると、莊園現地での徴収はなかったかのようにあるが、実はそうではない。免除や京済を認める旨の奉書が出たからといって、必ずしも莊園現地での徴収が止むわけではなかったのである。例えば、永徳三年（一三八三）の後小松天皇の御即位段銭の際には、「御免御書下以後、御使方五貫文被責候条」と代官祐尊がはっきりと述べているように、京済が認められているにもかかわらず、守護使による暴力的な収集が行われているのであり、他の例の場合も同様の事態がつねに背後にあったものと考えなくてはならない。

賦課・免除主体の変化から見て、その画期となるのは応永六年の日吉段銭で、この賦課に際して幕府の直接の関わりは見えず、東寺は守護方とのみ免除交渉をしており、これ以後も、同様の例が増える傾向が読みとれる。次の史料は、その時の東寺と守護方の交渉の様子を示すものである。

（史料④）

日吉段銭京済要脚^(之)事、於守護方、被指日限^(候)了、其子細、先立

播磨国矢野莊における段銭の賦課と免除

嚴密被仰^(下)候之處、于今、不被取進候、珍事候、此上者、莊家好守護使譴責候歟、返々不得其意候、且代官方沙汰之次第、未練之至極候、急速可被取進候、（中略）
（応永六年）
七月四日

快俊

良快

矢野莊例名^(方)政所殿⁽²³⁾

史料④の前提として、東寺は守護方との交渉によって、この時に賦課された日吉段銭について、京済とすることに成功していた。そして守護方から納入期限を指定されたので、莊園現地にその旨を伝えて、京済分の段銭を納めるように命じていた。しかし、矢野莊からは一向に納められず、このままでは、守護使の莊園現地への入部という事態を招いてしまうとあせった東寺は、公文両名の連署でこの費用をとにかく早く納めるように命じている。一般に京済とは、守護の手を介さずに直接京都の幕府に段銭などを納めることであるとされている。しかし、ここで京済の期限を定めているのは守護赤松氏であることに注目したい。京済が認められることによって、守護が段銭の徴収に関わらなくなるというわけではなかったのである。以上のような事情から、「結果」の欄が多く「免除」あるいは「京済」となっていないのも、「賦課・免除主体」の欄における守護の関わりが次第に大きくなっていくことから、幕府段銭・守護段銭の別にかかわらず、実態として段銭徴収における守護の役割の増大を確認することができたといえる。

2 山名氏守護期

嘉吉元年（一四四一）、赤松満祐は將軍足利義教を暗殺して領国播磨へ下向した。この嘉吉の乱の際には、下国した赤松氏に対して播磨国内の諸方から札銭が納められたことがわかり、直接段銭の例ではないものの、守護の下国と守護への負担の関係を示すものとして注目される。その後、幕府軍によって攻め滅ぼされた赤松氏に代わり、乱の平定に大きな軍功を挙げた山名氏が、播磨国守護職に補任されることになった。この守護家の交替は矢野荘における段銭の賦課・免除にどのような影響を与えたのであろうか。ここでは、表2について、表1から読みとったことと比較しながら検討していきたい。

まず、一四四一年から一四六六年の二十五年間に、二十五件の段銭賦課があったことがわかる。平均して毎年一度の割合であり、表1と比べて確実に増えているといえる。また、「段銭賦課の名目」についてその傾向を見るならば、あいかわらず寺社修営費用や朝廷関連費用が十二件と約半数を占めるものの、一見してわかるように、「公用段銭」あるいは「御要脚段銭」と称する守護独自の段銭の賦課が十三件にのぼり、表1に比べてこれも格段に増えているのである。

それでは、守護家の交替という事態は、段銭賦課をめぐる東寺と

守護との交渉関係にどのような影響を与えたのであろうか。嘉吉二年の賀茂社造宮段銭、翌三年の外宮仮殿段銭、文安元年の内裏御要脚段銭といったように、嘉吉の乱の翌年から毎年続けて、幕府段銭が矢野荘に賦課され、そのたびに東寺は、免除や京洛を求めて交渉を積み重ねている。その交渉のあり方は、嘉吉二年の守護山名持豊奉行人垣屋熙統書下案の奥に書き添えられた、次の一文から読みとることができる。

私云、此折紙、自国方、国奉行方書下也、公方奉行折紙無之、其故、奉行大和入道返答云、今度段銭事、伺申処、四、五所事ハ、以別儀、被免了、仍直為奉行、垣屋方へ申付候、不可^及奉書出候、但、於国、猶有催促者、重伺申、可出折紙之由返答、此上者不及力、又無国催促、仍公方奉行奉書無之、²⁵

この一文は、嘉吉二年の賀茂社造宮段銭の免除について、東寺のもとに守護方による催促停止の折紙はあるものの、幕府による免除の奉書が無いことについて、その理由を記したものである。傍線部の記述から、直接に幕府奉行人によって守護奉行人の垣屋氏に対し免除を命じたため、幕府の奉書は発給されなかったとの事情が知られる。このことからこの時期、東寺の交渉相手は幕府を主とし、守護との関係は、幕府の命令に従って、守護代に対して国における催促停止命令を出すといった関係にとどまっていることがわかる。

「賦課・免除の主体」欄からもわかるように、表1の赤松氏守護期の後半に比べ、守護が山名氏に交替した直後の表2の前半では、幕

府段銭の賦課・免除における東寺と守護との関わりが明らかに薄くなっているのである。

表2からわかる通り、山名氏による初めての守護段銭が矢野荘に賦課されたのは、文安四年で、山名持豊が播磨国守護職に補任されてから六年後のことであった。この段銭には賦課の名目がなく、単に「御公用段銭」と記されるのみであり、守護独自の段銭であったことがわかる。このときの賦課については、次の段銭配符が残っている。

(史料⑤)

赤穂郡御公用段銭之事、去十四日任御奉書旨、公田壹段別百文宛事、今月廿五日以前、可有究済由、被仰下候、無沙汰在所者、以騎馬使節、可致催促候也、仍状如件、

文安二

五月廿日

有貞(花押)

高光(花押)

吉家(花押)

経朝(花押)

矢野荘 東寺領⁽²⁶⁾

この守護段銭は、矢野荘を含む「赤穂郡」という郡単位で賦課されたもので、公田一段につき百文を、この文書の日付からわずか五日後の二十五日までに納入するように命じている。また、もし納めなかった場合には、「騎馬使節」を矢野荘に入部させて催促すること

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

とを記すなど、守護による段銭徴収の暴力性を如実に示すかなり厳しい内容である。

東寺はこの突然の守護段銭の賦課に対して、幕府の奉行人で東寺の寺奉行であった斎藤熙基を通じて、守護方に免除を訴えた。その結果として、六月二日付で守護山名持豊の奉行人連署奉書が出され、守護代に宛てて催促停止が命じられた⁽²⁷⁾。このように、東寺は守護段銭についても、幕府奉行人を窓口として免除交渉を行っている。すなわち、守護家の交替という事態にともなって、この時期の東寺は、守護奉行人との直接交渉の回路を失っていたと思われる。史料①で確認したような赤松氏守護期における上原性智と東寺の関係は、山名氏との間でいまだ構築されておらず、そのため表2の山名氏守護期の前半では、段銭の賦課・免除主体としての守護の関わりが薄くなっていると思われるのである。しかし、実際には矢野荘現地に及ぼす守護の影響力は次第に強まっているのであるから、京都の東寺にとって、守護と直接交渉できなくなったことは、守護への規制力が弱まったことを示し、これまで以上に守護勢力による矢野荘への干渉を招く結果になったといえるであろう。

そのような中で、これ以後、文安四年(一四四七)から享徳二年(一四五三)まで毎年、守護段銭が矢野荘に賦課されている。そしてその度ごとに免除を認める守護の奉書がくり返し出されている。⁽²⁸⁾表2の「結果」欄を見ると、表1に比べて「免除」あるいは「催促停止」が多く、合わせて十九件にものぼるが、これが単なる負担の

減少とはならなかったことについては、後述したい。

さて、表2の後半になると、再び変化が起こる。幕府段銭の賦課における守護の役割が増大し、また東寺と守護との直接交渉の場面も増えていくのである。

(史料⑥)

一 矢野庄段銭等事、内宮役夫工米銭五十文、并腰脚分五十文、(要)但州円通寺御造宮料十文、都合段別百十文配符在之、
致披露処、急々免除可被申之由、評議了、⁽²⁹⁾

(史料⑦)

一 矢野庄段銭等免除之奉書公方守護方到来之間、則国へ被執下候了、次同一献祈之事、拾貫文分閏八月中可有運送、若無沙汰之事有之者、以一倍分、可有催促之由、評議了、⁽³⁰⁾

史料⑥・⑦は、享徳元年の「廿一口方評定引付」の記述であるが、矢野荘現地に配符が入れられた段銭について、その名目ごとの内訳を東寺供僧が記していることが注目される。史料⑥によれば、合わせて段別百十文のうち、「内宮役夫工米銭」が五十文、「要脚分」が五十文、「但州円通寺御造宮料」が十文であった。つまり、このとき賦課された段銭のうち、幕府段銭は五十文のみで、残りは守護が付け加えた分であった。守護は幕府段銭の賦課に乗じて、守護段銭を賦課したのである。この内訳の注記は、免除の奉書を申請する先が異なるために行われたと考えられ、この賦課の名目に合わせて東寺は、免除交渉を幕府・守護山名氏に対してそれぞれ行ったのであろう。その結果、史料⑦のように、幕府と守護から別々に免除の奉

書が届けられている。これらは案文が残るので、次に挙げておく。

(史料⑧)

東寺領播州赤穂郡矢野庄内例名 内宮役夫工米事、先々為免除之地土者、可被止催促之由候也、仍執達如件、
享徳元 八月十一日

八月十一日

(治部) 国政 在判
(斎藤基恒) 玄良 在判
(町野) 淳康 在判

守護代⁽³¹⁾

(史料⑨)

東寺領播州赤穂郡矢野庄内例名 内宮役夫工米、次御要脚并但州円通寺造宮段銭等之事、任御奉書旨、可被止催促之状、如件、
享徳元 八月十三日

(恒屋) 常朝 在判
熙統 在判

野間石見守殿⁽³²⁾
上垣隠岐守殿

史料⑧は、幕府奉行人連署奉書で、内宮役夫工米についてのみ免除を認め、催促停止を命令しているのに対し、史料⑨は、守護山名氏の奉行人連署奉書であり、幕府奉書の内容を請けて出された形式にはなっているが、内宮役夫工米に加えて、御要脚段銭・但州円通寺造宮段銭などの催促停止にも言及している。ここでは免除されているものの、段銭の賦課・免除に関する守護の権限が、幕府よりも大きくなっていることがわかる。

二 段銭の免除と百姓の負担

これまでみてきたように、矢野荘への守護段銭の賦課は山名氏時代になるとともにその頻度が増し、また、幕府段銭の賦課についても、守護の関わりが次第に大きくなっていくとともに、莊園現地が守護使による譴責を受ける危険性も増していく。東寺に残された史料を見る限りでは、結果的に免除あるいは京済が認められることが多かったとはいえ、そのことをもって、段銭の賦課が矢野荘の百姓の負担に何の影響も与えなかったということにはならないであろう。以下では、莊園領主東寺と矢野荘の百姓の間でくり返された、段銭の賦課と免除をめぐる交渉の実態について検討し、守護による段銭賦課がもたらした百姓の負担について考察していきたい。

(史料⑩)

一 公用段銭守護方^被。懸之、注進之間、披露之處、此一献分七貫文^{矢野荘}。急上進之者、国方ノ免状可被下之由、書下有之^可。注進之使可^仍追下之旨、衆儀畢、

如此、御治定之處、彼使^内田申云、此御一献分^并。去官庫反錢御一献分兩度分、来^八。月中ニ悉寺納可申、無沙汰仕者、内田彦三郎名田悉可没収之由、起請之請文仕申之間、免状下畢、

宝徳二年(一四五〇)七月、矢野荘現地より、守護方から公用段銭が懸けられたという注進が入ってきた。東寺としては、「一献分」

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

の七貫文を急ぎ納めれば、「国方ノ免状」を下してやるとの命令を、注進してきた使者に託すつもりであった。この「一献分」とは、史料⑧の「一献料」と同じもので、東寺による守護方との免除交渉に対する、莊園現地からの礼銭の意味をもつ。「国方ノ免状」すなわち守護方の免除状とは、前回守護方から公用段銭が賦課された文安六年(一四四九)のものを指すのか、あるいは今回あらためて守護に申請して、あらためて免除状をもらうつもりであるのか明らかでない。いずれにしても、東寺としては礼銭を得ることを条件として、その納入を見極めたのち、莊園現地に守護方の免除状を差し下すことを主張したのである。しかし、この決定に対して、使者である内田彦三郎が言うには、「今回の公用段銭の御一献分と先の官庫段銭の御一献分を来月中に必ず納めます。万一滞納するようなことがあったならば、自らの名田を全て没収して下さい」と起請文を書いて訴えるので、結局、供僧は守護方の免状を下すことにした。一刻も早く矢野荘に免状を持ち帰り、守護使にそれを提示しなければならぬという切迫した状況のもとで、百姓を代表する立場で東寺と交渉する名主内田彦三郎の強い決意が伝わってくる一節である。

このような東寺による交渉費用の在地転嫁は、すでに赤松氏守護期から行われている。永享六年(一四三四)には、「浄円今度播州下向、守護不入御判一献分、廿貫文地下可被懸、但遵行已後可被仰下云々」⁽³⁴⁾とあり、守護との段銭免除交渉ばかりでなく、守護不入の権利を得るための幕府との交渉の際にも、東寺から莊園現地に対し

て負担が求められたことが知られる。そして、山名氏守護期になると、この「一献分」をめぐる東寺と百姓の交渉はより頻繁に行われるようになった。

(史料⑪)

A 文安二年(一四四五)⁽³⁵⁾

一矢野莊役夫工米段錢注進之間、令披露之、沙汰用途六貫文地下

江可相懸之由、衆儀畢、

B 宝徳三年(一四五二)⁽³⁶⁾

(矢野莊)

一同莊不入遵行雖可被下之、沙汰用途可有共沙汰、此沙汰用途^(其)參十
五貫文可有運送、其時遵行可被下之由、書下可有之旨、衆儀畢、

C 長祿三年(一四五九)⁽³⁷⁾

(十月十一日) 一矢野莊ヨリ役夫工米并用脚段錢事、注進之由披露之^{免除}

処、沙汰用途并当年々貢、先雖少分、可運送、然者可有了簡候由、令返答、可追下云々、

(十月廿三日) 一矢野莊役夫工米京濟事并守護段錢免除事、披露之

処、用脚段錢者、取免除折紙、急可被下、次至役夫工米者、申下地下、有運上者、可有御了簡^{云々}、

(十月廿四日) 一自矢野、反錢沙汰用途五貫文運上之由、披露之處、如昨日評議、可有沙汰之由、衆儀了、

(十一月三日) 一矢野莊内宮役夫工米事、可為京濟之由、奉書出之、次至守護段錢者、免除折紙出之、

一会尺事、問注所百□^{矢野}正^{太良}各□之、百卅正飯尾大和、百五十

疋垣屋会尺以下、

D 寛正三年(一四六二)⁽³⁸⁾

一矢野莊去年之役夫工米段錢免除之事申間、披露之處、自去年、

免除事被召^取置間、聽可下候、但一献料事、^先千疋分可申下由、評義了、

E 寛正四年(一四六三)⁽³⁹⁾

一矢野莊^{造作}要脚段錢免除事、百姓五郎大夫令參洛、歎申之間、披露之處、一献料不進之間、御了簡難叶、急罷下、沙汰用途持參申者、可有御了簡之由、令下知、可追下之由、衆儀治定了、

史料⑪のA、Eの史料は、「廿一口方評定引付」の中から、矢野莊に対する段錢の免除や守護使不入權の獲得に際して、東寺から莊園現地に課された「一献料」あるいは「沙汰用途」に関連する記事抜き出したものである。「沙汰用途」の語は、ここでは交渉費用の意味で使われていると考えられる。

Aでは、役夫工米段錢の賦課が注進されたことをうけて、沙汰用途六貫文を地下に懸けるように取り決めている。Bでは、沙汰用途三十五貫文を送るように求め、その後に入りの遵行状が下されることを伝えている。

Cは、矢野莊に賦課された役夫工米と守護段錢について、長祿三年の十月から十一月にかけての供僧の対応の過程が詳細にわかる史料である。莊園現地から注進を受けた供僧では、まずは沙汰用途を納めるように命じ、その納入を受けてから寺家として免除のための

処置に動くことを確認した。ところがその後、守護段銭については、急いで沙汰用途の納入を待たずに、守護方から免除の折紙をとって荘園現地に下すべきであると方針を変更している。その結果、役夫工米については京洛、守護段銭については免除の折紙を獲得した。供僧は幕府方・守護方に対して、それぞれ礼銭を支払っている。

Dでは、一献料としてまず千疋(十貫文)を納めたのちに、すでに守護と交渉して取ってある免除状を下すことを決め、Eでは、守護方から課された造作段銭について、守護方との免除交渉を寺家に依頼するために上洛した百姓五郎大夫に対し、「一献料」を納めていないという理由で聞き入れず、急ぎ荘家へ戻り「沙汰用途」を持参したならば、守護方と交渉してやろうと命じており、ここでは「一献料」と「沙汰用途」は同じ意味に使われている。

以上の各史料からわかることは、まず、「一献料」「沙汰用途」の額が、五貫文から三十五貫文までかなりの幅があるものの、常に高額であり、百姓にとって大きな負担となったであろうことである。次に、その負担の大きさにもかかわらず、史料⑩や⑪のEなどに見えるように、矢野荘の百姓は使者を上洛させるなどして、東寺に対し、守護方との交渉を積極的に依頼していることである。高額の礼銭を支払ったとしても、守護使の入部よりはまだましであったというところであろうか。このような百姓のあり方に対して、それに対する東寺の対応はあまりにも緩慢で、危機意識が欠如しているように見える。このような東寺の態度の背景には、請負代官制の導入とも

播磨国矢野荘における段銭の賦課と免除

通底するような、荘園支配における当事者意識の薄れがあったと考えられ、そのことがこののち程なくして矢野荘が東寺の支配を離れる前提となった。

これ以降、段銭の賦課論理の問題は、守護と矢野荘百姓との交渉の場面で考えられなくてはならないだろう。そして、この時点では、その論理が百姓にとって妥当なものとして捉えられることがなく、あるいは正当性をもたないために、百姓は免除を求めて荘園領主という交渉の回路を利用しているものと考えられる。

おわりに

以上本稿では、東寺領播磨国矢野荘に賦課された段銭について整理し、その賦課の名目や賦課・免除の主体の変化について守護段銭を中心に考察してきた。その結果、幕府によって賦課される段銭には必ずその名目(使途)が問われるのに対して、守護独自の段銭については、一部に国内寺社の修造を名目とした段銭が確認される程度で、はっきりとした名目がない場合がほとんどを占めていたことがわかった。問題となるのは、守護による段銭賦課の正当性がどのような形で保証されていたかである。本稿で注目した赤松氏守護期の永享四年の例では、守護の下向がその名目となっていたと考えられる史料が存在する。この例を含めて、守護段銭が賦課された前後の状況から判断すると、守護―荘園領主間の段銭賦課の論理は、内

乱状況下の領国において、守護によって担われた治安維持の機能に、その正当性を求めたものであったと推測した。その後、播磨国は守護赤松氏の時代から山名氏の時代へ移るが、守護段銭を中心として、段銭の賦課はより頻度を増していく。

しかし、今回の考察範囲の限りで、矢野荘現地の百姓にとって、守護による段銭賦課は、彼らにとって正当な負担として受け入れられることはついになかった。百姓たちは、次第に荘園支配の当事者意識が薄れつつあった荘園領主を、最大限に利用することによって、何とかして段銭の負担から逃れようとしていたのである。つまり、本稿では明らかにすることができなかったが、守護による段銭賦課が、守護と荘園領主の交渉ではなく、守護と百姓との交渉の場面で、どのような正当性をもっていたのかについて、戦国大名による段銭賦課を視野に入れつつ考察することが必要であると思われる。なお、この問題を考える際には、本稿で考察を加えたのと同時期の、守護役の賦課に関する近年の研究⁽⁴⁰⁾成果を踏まえることが必要となるであろう。今後の課題としたい。

註

- (1) 室町期の段銭に関する先行研究は数多いが、ここでは本稿の問題関心に関連して、主要論文を挙げるにとどめる。田沼睦「公田段銭と守護領国」『書陵部紀要』十七号、一九六五年。百瀬今朝雄「段銭考」『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年。市原陽子「室町時代の段銭について―主として幕府段銭を中心に―」『歴史学研

究』四〇四・四〇五号、一九七四年。

(2) 田沼氏前掲注(1)論文。

(3) 『国史大辞典』第九卷、吉川弘文館、一九八八年。今岡典和氏執筆部分。

(4) 菊池浩幸「室町・戦国期の段銭と大名権力―防長地域を事例に―」『人民の歴史学』一四二号、一九九九年。

(5) 市原氏前掲注(1)論文では、「東寺領荘園の段銭催・免史料」という表を作成している。また、『相生市史』第二巻では、市原氏の表から矢野荘関係の段銭を抜き出し、「矢野荘に対する段銭」表を作成している(一九八六年、第二章第二節の3、馬田綾子氏執筆部分)。ただ、これらの表では幕府段銭を中心に扱っているため、守護段銭については載せられていない。本稿では守護段銭の成立を考えるため、市原氏の表を参照しながら、あらためて関連文書を集め表を作成した。関連文書の抽出にあたっては、『東寺文書検索システム』(東寺文書データベース作成委員会、二〇〇一年)を利用させていただいた。記して謝意を表したい。なお、田沼睦氏は前掲注(1)論文において、大山荘における守護段銭を含めた段銭関係史料を整理して表にされている。

(6) 佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集 第二巻 室町幕府法』追加法一一二。

(7) 百瀬氏前掲注(1)論文。田沼睦「室町幕府・守護・国人」(『岩波講座日本歴史7中世3』一九七六年、岩波書店)。

(8) 「刑部二郎右衛門入道法善供僧・学衆両方代官職請文」寛正五年九月八日付(『東寺百合文書』ヤ函一〇九)。なお、引用史料は、『相生市史』第七巻・第八巻上下(一九九〇～一九九五年刊)の「矢野荘に関する史料(一)」「(二)」「(三)」を主に利用した。以下、東寺百合文書は、函名と番号のみを記す。

(9) 「室町幕府御教書案」応永六年二月二十九日付(ユ函五四)。

(10) 「廿一口方評定引付」応永十二年十月十九日条(く函二〇)。

(11) 「廿一口方評定引付」永享七年八月廿七日条(く函一四)。

- (12) 百瀬氏前掲注(1)論文。岸田裕之「守護支配の展開と知行制の変質」『史学雑誌』八二―一一、一九七三年(のち、同氏『大名領国の構成的展開』吉川弘文館、一九八三年所収)。
- (13) 「廿一口方評定引付」正長元年六月十五日条(ち函七)。
- (14) 「廿一口方評定引付」応永三十四年十一月廿六日条(天地二四)。なお、「白旗城先納米」の一件については、「廿一口方評定引付」正長元年二月十六日条(ち函七)などを参照。
- (15) 「廿一口方評定引付」正長元年十一月六日・七日条(ち函七)。
- (16) 「薩戒記」永享元年正月二十九日条(『相生市史』第二卷)。
- (17) 「廿一口方評定引付」永享四年七月四日条。
- (18) 「守護赤松満祐守護段銭免状案」(牛函八九一)。
- (19) 「廿一口方評定引付」永享四年七月二十五日条(天地二六)。
- (20) 市原氏によれば、大山荘と太良・矢野・上下久世荘では、段銭が賦課される頻度が異なり、同一領主の支配下にある荘園においても、段銭の免除されやすいところと比較的免除されることの少ない荘園の區別が存在するとされる(市原氏前掲注(1)論文)。
- (21) なお、表1の「結果」欄を、守護赤松氏の家督継承の時期と重ね合わせて考えると、義則の時代には「京洛」が多く、満祐の家督継承以後は、「免除」が多くなるという大まかな傾向が読みとれるが、その意義付けについては今後の課題としたい。
- (22) 「祐尊書状案」至徳元年八月廿二日付(牛函四九一)。
- (23) 「快俊・良快書状案」(応永六年)七月四日付(『教王護国寺文書』七七七)。
- (24) 「廿一口方評定引付」嘉吉元年八月九日条(天地二七)に、「一、自矢野荘代官申、自諸方、国方へ礼有之」とある。
- (25) 「守護山名持豊奉行人垣屋熙統書下案」(牛函八九一三)。案文の本文に続いて奥に書かれたこの一文は、東寺において段銭免除関係の文書を整理して案文をつくる過程で、東寺側の人間によって書かれたものである。また、「廿一口方評定引付」嘉吉二年十月廿九日条(く函一六)には、矢野荘に賦課されたこの賀茂社造管段銭について、段銭奉行の飯尾大和守に二百疋を贈り、免除を訴えるべきとの評議の記事があり、飯尾との免除交渉について、細部にまで言及しているこの一文の内容が裏付けられ、文書の日付からさほど隔たらない時期に書かれたと判断することができる。
- (26) 「公用段銭配符」(し函一一三)。
- (27) 「守護山名持豊奉行人連署奉書」(牛函八九一四)。
- (28) 宝徳三年については、「反銭方入足八貫文内、且伍貫文運上」とあるのみで、詳細は不明である(「廿一口方評定引付」宝徳三年十一月廿八日条(天地三〇))。
- (29) 「廿一口方評定引付」享徳元年八月九日条(く函二〇)。
- (30) 「廿一口方評定引付」享徳元年八月十二日条(く函二〇)。
- (31) 「室町幕府奉行人連署奉書案」(牛函九七一)。
- (32) 「守護山名持豊奉行人連署奉書」(牛函九七一)。
- (33) 以前に取得したものを下すということであれば、「守護山名持豊奉行人垣屋熙統奉書案」(牛函九三)のことを指すと考えられる。
- (34) 「廿一口方評定引付」永享六年四月廿三日条(ち函一〇)。
- (35) 「廿一口方評定引付」文安二年十一月廿四日条(く函一七)。
- (36) 「廿一口方評定引付」宝徳三年四月十三日条(天地三〇)。
- (37) 「廿一口方評定引付」長祿三年条(天地三四)。
- (38) 「廿一口方評定引付」寛正三年二月四日条(ち函一七)。
- (39) 「廿一口方評定引付」寛正四年七月廿一日条(天地三六)。
- (40) 稲葉継陽氏は、内乱期において地域を制圧した守護によって課される百姓陣夫役・城普請役などの「公事」は、百姓が大名権力から平和の負担(百姓が「領国の平和」を享受する代償)として要求され、果たされ続けたものであったことを明らかにしている(稲葉継陽「中世後期における平和の負担」『歴史学研究』七四二、二〇〇〇年)。